

マン・マシン・コミュニケーションにおける

4 B-3 「友好感情」生起への考察

(8) モバイル・コンピューティングの「躍動性」、「交流性」

糸魚川幸宏

日本ユニシス(株)広報部

1. 研究の目的

本論文の目的は移動する時に見られるモバイル感情を機器により記録、送信受信することにより新しい文化的創造活動を可能にしていく方向を個別的事例の研究により行なうことである。企業を取り巻く環境の研究からデータを収集しモバイル・コンピューティングの将来像などへも考察を行なう。

2. モバイル的環境の研究および調査過程

2-1. 営業支援のデータバンク・活用例；日本ユニシス(株)情報センターへ地方の営業マンからの会社概要データ、雑誌記事の検索依頼の5事例をみると、営業先で発生したニーズにより電話により依頼がなされFAXによって情報が送信されている。検索依頼は一過性で発信が継続することはない。

2-2. PHS、携帯電話使用の見聞事例；田園都市線ではPHS等の使用を禁じる放送がなされているが車中でのPHSの利用を数回見聞した。展示会場等でPHS、携帯電話の使用を3例把握したが発信先は2人から10人以内であった。PHSを研究仲間との発信に使い始めた人は「会話コストが下げられる」から出来るだけ多くの人に電話番号を教えている。名刺、葉書等に住所、電話、メール・アドレス等と一緒にPHS、携帯電話を表示した人は5事例しかない。職種は生命保険業、独立コンサルタント業、経営工学の研究者等。商機、プライバシー保護などが使用理由。大学生(PHS、携帯電話所有率14.4%)の友人、恋人との交流がよくなったという報告があるが(片山美由紀、1997、日本社会心理学会)、ビジネス以外の移動体通信のリアルタイム性に疑問を感じる教師の意見もある。携帯電話料の高さの指摘もある。

2-3. ノートパソコンのモバイル・コミュニケーション；この1年で見聞した2事例からはシリコンバレーへの出張先からの送信、コンテンツ・ビジネスの営業という活動との接触からモバイルの躍動性を感じたが転職で継続発信不可能という一過性のコミュニケーションとなった。海外において日本との発信を図ったパソコンに熟練した人の2事例からはホテル等からの日本との通信可能回数の少なさが判明した(平成9年11月の段階)。出張にモバイルコンピュータを持参、研修状況、受講者の状況などを逐一報告、講師の状況を知ってもらうのに役立て仲間でも好評という1事例がある。

2-4. モバイル・コンピューティングの現状把握；調査期間、平成9年9月-平成10年1月の間にモバイル・コンピューティングに関しアンケートを作成し電子メール送信、FAX、面談手渡しの方法で200人に配布した。平成10年1月14日で回収は62名(男性56名、女性6名)である。

3. コンピュータ文化を理解したプロ・ユースの事例への考察

モバイル・コンピューティングの実践が少ない状況(1997年日経マーケット・アクセス調査)で「モバイルの世界はそれを手にした人の価値観や人生観によって如何様にも使いうる道具としての可能性を秘めている」と感じているNさん(男性、55歳)の現実の活用と考え方につき考察する。

3-1. コンピュータ経験歴からのモバイル機器利用への意識形成

①学生時代に企業管理と機械化をテーマに卒論を書いた。当時はコンピュータは高嶺の花、PCが全盛。卒論の論旨は、将来は機械が発達し企業経営の実態が瞬時に分かるようになる。その時、問われるのは数字の管理ではなく、企業理念、経営者の価値観、それに基づいた数字の見方であると考えた。

Case Study about User Friendly Systems(8) Comfortable Mobile Computing

Yukihiko Itoigawa / Nihon Unisys Ltd. Public Relations Department

② コンピュータの基本的概念は昔と何も変わっていない。複雑で巨大になった現在の社会の仕組みを効率よくスムーズに運営して行くための道具はコンピュータしかないしその能力は素晴らしい。

③ 私の卒論のイメージは技術的側面から見れば（人間的側面はさまざま）完全に実現した。これだけ大衆化した道具としてのコンピュータを我々が、一度しかない我が人生をより意義ある楽しくそして自分自身を存在感あるものとして実感できる道具として使わない手はない。

3-2. 家庭でのパソコン使用の状態

① 現在仕事の関係で家族は別れて生活。それぞれの生活のリズムが異なり時間的なギャップをうまく埋めてくれる電子メールが役にたつ。家族間でそれぞれの時間帯に合わせて送るIDを変えている。

② 家族の旅行仲間がいるが、ほとんどの相談はメールで行っている。スケジュールなどを調整するのはメールが一番楽。また添付機能でいろいろな媒体を送れるのも便利である。

3-3. モバイル感情の送信と移動体通信機器の使用について

① PHS使用は通話地域が狭いので携帯電話に切り替えた。携帯電話は私用、社用を含めかなり頻繁に使用。交信相手多数、内容も多岐。長時間かかる内容の場合は公衆電話又は一般電話を使用。

② ノートパソコンはノートとサブノートがある。サブノートは国内外に出張する時に携帯。使用頻度は多い。特に海外出張の場合は会社との連絡に頻繁に利用。交信相手は社用以外は家族と友人であり人数は限定される。内容は電話代わり。チャット、フォーラムはしない。色々な媒体が送れるのも便利。

③ 現在デジタルカメラを持っており、海外出張した時には現地の様子などを送信。海外での買い物を家族に頼まれた時に品物を写真にとり、望んでいた物かどうかを確認のために使用。

3-4. モバイル交信事例への考察

① 企業環境研究で出されたデータ（7人）のモバイル実践、見聞は職種柄「トラブル待機」という回答があったがNさんの事例データに集約される。スタッフ部門はモバイル活用の状況を感じていない。

② 情報企業の営業マンはPHS、携帯電話、ノートPCを完備。ネットワーク送信はしていない。

③ 女性は育児などからモバイルに注目している（管理職）。

4. 新しい文化的創造活動利用へのモバイル機器の活用への考察

4-1. 現実のモバイルな感情生起への考察

① 移動時の感情が印象強く記憶されることはスポーツ放送の記憶事例で知られる（糸魚川幸宏、名選手の生まれる心理風土への考察、1996-1997、日本心理学会発表論文集）。

② 絵画とのインタラクティブにおいても望郷感情等が発生する（糸魚川幸宏、都市の心理的風景、1997、日本社会心理学会発表論文集）。旅先からのモバイル感情の送信にデジタルカメラによる画像が送信できることは家族、友人に楽しい感情を生起し文化的変化を生んでいくと考えられる。

③ バレンシアの7人の芸術家が「移動」のテーマの下に作品を展示したが移動は静寂の世界をもたらすと感じた。静寂を人に伝えることをモバイル機器で活用することは新しい文化的創造へつながると考えた。静かさの伝達は文字の送信で可能になる。思いつきのメモに代わる記録機器が求められている。

4-2. 非意識的保持情報の記録と具体的移動体験への考察

① 現実にモバイル機器を活用する文学的創造活動の事例は本調査ではなかった。

② 江戸時代の旅装束で各地の街道を歩く人は約17年の街道歩きでの一日最高は48キロ、通常のペースで大体30キロ位は歩いた。この過程で旅姿の人は人との出会い、ふれあいに大きな喜びを感じるが、詩、俳句、知人への手紙などの発想はわかず、モバイル機器の使用を考えていない。

③ 山頭火、若山牧水等各地を歩き俳句、短歌を創作する人は明治以降にも多い。芭蕉と言えば「月日は百代の過客」と30年振りにリーセンドする人は少ない（自動車販売会社社長1例）が、パソコンによる新しい文化の創造旗手としてモバイル機器の活用の進展が課題となると考える。